

間の行為で、文化の枠に取り込むことである。しかし、その現実をあらゆるさまに表現することを躊躇する心が、先住する自然神を大型動物に仮託して退治し、神に祀ることで鎮慰する物語に形象する。その背景には人並み外れた土木事業を遂行する技術者集団が確かに存在したことを読みとるものである。

注

- (1) 「みかべのよろい」〔菅江真澄全集〕第四巻 一九七三 未来社
- (2) 「山人と新田開発」〔講座日本の伝承文学〕第十巻 二〇〇四 三弥井書店
- (3) 土岐貞範「岩木山縁起」〔文化八年 弘前市立図書館蔵〕
- (4) 「赤倉山の鬼神―津軽・鬼民俗誌―」〔東北学〕二号 二〇〇四
- (5) 若尾五雄「鬼伝説の研究」(一九八一 大和書房)『金属・鬼・人柱その他―物質と技術のフォークロア』(一九八五 堺屋閣書)
- (6) 平成一八年八月二一日の聞き書きによる
- (7) 『白鷹町のとんとむかしとうびんと』(平成七年 社会福祉協議会)

(はなべ・ひでお／國學院大學)

シンポジウム／鬼と山人―『津軽口碑集』を基点として―

鬼に託されたもの

― 怪異記述の系譜 ―

小池 淳一

一 問題の所在―鬼・大人・山人

鬼と山人の問題をここでは民俗事象、あるいは怪異をめぐる記述の問題としてとらえてみたい。

本稿で取り上げる津軽地方の鬼については多くの先行研究が存在する「坂本一九八八、畠山一九九七、内藤二〇〇七など」。その多くは鬼を金属加工や開墾に携わるといった非農耕民的な存在もしくはその投影としてとらえ、そうした津軽地方の伝承の特異性を重視するものである。ここではそうした研究に導かれて新たな見解を付け加えようとすることはしない。先行研究の多くが依拠している資料の基礎的な性格について検討を加え、それらの記述自体の生成過程を推測し、その記述態度を論じることとする。そしてそれらの特質や場合によっては抱え込んでいる歪みについて自覚的であろうとすることを試みる。

最初に確認しておきたいのは、先行研究の多くは津軽地方の鬼を論じようとする時に、資料の記述に即して、鬼だけではな

く、大人も視野に入れて考究し、さらに大人と山人とを類似のものとして、民俗研究における山人研究に接続する志向を持つ場合が少なくないことである。このこと自体を詳細に検討することはしないが、そうした姿勢によって津軽の鬼をより広い文脈のなかで問おうとする傾向を指摘しておきたい。

基点となる内田邦彦の『津軽口碑集』（一九二九、本稿では『日本民俗誌大系（9）東北』、一九七四、所収のものを参照し、同書の頁数を示す。）には鬼の記述は実はそう多くはない。昔話の「桃太郎」の鬼（四三二頁）や昔話「三枚のお札」における鬼婆（四三九頁、五月節供由来譚）、ことわざ「鬼もつまずく河童も水くらい」（四四五頁）の他、年中行事の項のなかで六月朔日「鬼の骨、囃む」（五二二頁）、九月一日「鬼神を信心すれば中気を免る」（五二三頁）、十二月二日「若木山の鬼が梵珠岳へ飛んでいく」（五二四頁）などが主要なものである。これらの記述の特質を考えるために、以下、先行する民俗の記録として遇されてきた工藤白龍『津軽俗説選』（天明六・一七八六〜寛政九・二七九七頃）、平尾魯僊『谷の響』（万延元・一八六〇）を取り上げて、その鬼の記事を検討してみたい。

二 『津軽俗説選』の方法―「書物の知」

一八世紀末に弘前城下、本町の練屋藤兵衛こと工藤白龍は、学問を好み、さらに津軽各地に伝えられ語られていた今日でいうところの伝承に興味を抱き、それらを多年にわたる筆記の末、

最終的に五冊にまとめた。現在では青森県叢書第一巻として活字化されている（本稿でも青森県叢書版を参照し、同書の頁数を示す）。上下篇は神、仏、菌、草、樹、禽、鱗、蟲、介、獣、人といった分類が試みられ、伝承、奇譚を内容によって区分し、整理しようとする意図があったことがうかがえる。特に貝原益軒の『大和本草』（宝永六・一七〇九刊）からの引用が多く、本草学の知識が白龍の知的基盤の一つであったらしい。

その記述態度は項目の最初に伝承的な記事を「里俗」として掲げたのち、次いで関連類似の事項をさまざまな書物から引用して示しつつ、白龍自身の見解を述べていくというものである。「里俗」を取り上げながらも、その解釈や位置づけには書物（とそこからの知識）に頼ろうとするものということができよう。

鬼についてみると「嶽の大人」（七九一―八〇頁）は「若木の嶽、並に糠杖の嶽に大人と云ふものありて、怪異をなすといへり。」として津軽の大人に関わる伝承を集めて論じている項であり、「大人の談」（一五七―一五八頁）とともに大人を書物の知識を介して、鬼を論じている。「端午の俗」（八七―八八頁）は行事食の呼称に用いられる鬼という語とその考証である。鬼という語もまた「書物の知」の中から理解される傾向にあったということができよう。

三 『谷の響』の方法―「語り」と「話」

幕末から明治にかけての画家、平尾魯僊は魯僊の号を用い

て国学関連の著述を残した。なかでも『谷の響』は、津軽の奇事異聞集である。現在は『日本庶民生活史料集成（第一六卷）』に森山泰太郎による校注が施されて収められている（本稿でも同書を参照し、併せて頁数を示す。一一八は巻一の八頁の意）。全五卷九六話を採録して、幕末津軽の世相と奇談とを今日に伝えている。本書は森山泰太郎が指摘する「谷川ほか編一九七〇・一二六」ように、平田派の国学に傾倒して、津軽の地で神霊の活動や「かくり世」の实在を示そうとしたものである。ほとんどの話に、語った人物の名が付けられており、リアリティを強く訴える書きぶりである。話者はそれほど重複はしていないが、御蔵町の善蔵（二一八〜二〇）、三ッ橋某（二一一、三一五〜一六、五一五）などが多くの情報をもたらしている。

こうした実際の「語り」や「話」に基づくことを丁寧に主張している一方で、書物を引用することはそれほど多くない。『津軽』俗説選（一一〜三三）、『和漢三才図会』、『閑窓瑣談』（一一一六）、『西遊記』（橋南蹊）（二二一六）、『閑田耕筆』（三二四）、『北窓瑣談』（四一一）、『徒然草』（四一一〇）、『鬼神論』（魯僊の著、のちの『幽府新論』か。五一一〇）が見いだせる程度である。

記述態度はあくまでも見聞した人間の存在を通して事実であったことを主張し、幽界の存在、この世との並行をそうした事実の集積で示そうとしているものといえるだろう。「書物の

知」は遠景に押しやられ、リアルな語りを尊重する姿勢に貫かれているといつてよい。

鬼そのものの記事はなく、「鬼祭饌を享く」（二一一三二）は霊の存在を示す挿話で本文中には鬼の文字は用いられない。「鬼に仮装して市中を騒がす」（四一一六二〜一六三）に出てくる鬼は「角をうゑたる鬚をかむり虎の皮の犢鼻褌をしめ……」た格外で特に珍しいものではない。注目したのは「山霊」（二一一四六）において「大人」という語を「深山に住む者方言大人」と云々と解説している点で、当時の津軽において山と深く関わる存在として「大人」が用いられていたことが記録されていることになる。

四 『津軽口碑集』の位置と鬼の伝承

一九二九年に刊行された『津軽口碑集』から約七〇年程さかのぼる『谷の響』、さらに六〇数年さかのぼる『津軽俗説選』を記述の態度と鬼の記事とに注意して振り返ってみた。

本草学を基盤にしつつ、「里伝」を「書物の知」とつなこうとする『津軽俗説選』と、身近な生活者の「話」や「語り」を拾い上げ、国学的な神霊観を提出しようとしていた『谷の響』とを参照すると『津軽口碑集』の位置と特徴が明らかになるように思われる。

『津軽口碑集』は採録した記事の話を冒頭に「人物略伝」として掲げている（四二四―四二五頁）。例えば、太田豊次に

ついでには次のように記す。「唐笠柳の産。俚諺、歌を再び問わむとて樺太よりの帰路訪えば、病みほけてあり。このからだはもうあきらめたりと説く。頭髮疎らに咳嗽頻なり。胸塞がりたれば問わで別る。三十歳未満か。」

これは若干の問題がないわけではないものの、近世国学から近代民俗学が受け継いでいった「現在の事実」（『遠野物語』序）を把握する系譜に連なるものであることを示しているだろう。怪異をはじめとする民俗を人びとの語ったものとしてまず、受け止める姿勢がここにあり、それは津軽の地にあつては「谷の響」で早く徹底したかたちで試みていたことでもあつた。

『津軽俗説選』と比べて、指摘できるのは比較研究の意志である。『津軽俗説選』においては、「書物の知」が津軽と時空を隔てた土地や社会との比較の意志を支えていたと考えることができよう。『津軽口碑集』の著者である内田邦彦は房総に生まれ、津軽の地を意識して選んだ。そこには言葉（方言）や風土の壁が立ちただかつていた筈であるが、それらと向かい合い、受け止めた上での比較の志向があつたのではないだろうか。そうした長期滞在型調査とその成果として『津軽口碑集』をとらえることもできるだろう。

鬼の問題としては大人―山人という系譜の伝承は採録されておらず、昔話や年中行事における鬼をそのままとらえているという点で『津軽口碑集』は、『谷の響』に近いものがあるように思われる。それは津軽の特異な鬼伝承からは距離を感じさせ

るものではないだろうか。

五 結論にかえて―若干の見通しと今後の課題

本稿では鬼―大人―山人を考えるために、近世から近代にかけての津軽地方における伝承の記録を取り上げ、その記録の姿勢と鬼の記事とを吟味してみた。『津軽口碑集』が志向していたであろう口頭の伝承の比較はどのようにして達成されるのだろうか。意外なほどに少ない鬼の伝承資料が示すものは、鬼―大人―山人ではない年中行事や昔話の伝承のなかに溶かし込まれて表現される鬼を追究する、もう一つの比較研究の可能性ではないだろうか。そしてそれは鬼―大人―山人という津軽起源ではない、列島社会のなかで普遍的な鬼を考えることに接続していくだろう。

今後は津軽における鬼の伝承を菅江真澄をはじめとする旅人の記録や見聞のなかにも求め、ここで試みたのと同様の検討を加える必要があるだろう。さらに北奥羽に比較の方向を地道に広げていくことで列島社会全体の鬼をはじめとする怪異の記述―鬼に託されたもの―を再考することも可能なように思われる。

【参考・引用文献】

青森県立図書館青森県叢書刊行会編 一九五一『津軽俗説選』
（青森県学校図書館協議会）

石橋臥波 一九九八「鬼」志村有弘編『庶民宗教民俗学叢書』一…
一〇一六〇（勉誠出版）

伊藤龍平 二〇〇〇「柳田山人論の原風景―山人外伝資料」
「再見―」『昔話伝説研究』二二…九七―二八（昔話伝説研
究会）

内田邦彦 一九七四『津軽口碑集』『日本民俗誌大系（第九卷）
東北』…四二―五二四（角川書店）

岸野俊彦 二〇〇二「民間宗教者の地誌編纂、吉田正直の世界」
『尾張藩社会の文化・情報・学問』…二三三―二六〇（清文
堂出版）

小池淳一 一九九四「山人からまれびとへ―鬼をめぐる民俗学
史の試み―」『フォークロア』一…四〇―四六（本阿弥書店）

「一九九七」鬼の呪宝の系譜―昔話と陰陽道との交渉―
『昔話―研究と資料―』二五…八―二六（日本昔話学会）

二〇〇六「鬼と子ども」『伝承歳時記』…二二―
二二二（飯塚書店）

小松和彦編 二〇〇〇『怪異の民俗学④鬼』（河出書房新社）
坂本吉加 一九八八『津軽の伝説2』（北方新社）

谷川健一ほか編 一九七〇『日本庶民生活史料集成（第一六卷）
奇談・紀聞』（三二書房）

塚本学 一九九五「山人外伝資料」外伝「江戸時代人と動物」…
三二五―三三三（日本エディタースタール出版部）

内藤正敏 二〇〇七「岩木山の鬼と鉄―隠された鬼神―」『鬼

と修験のフォークロア』…七五―一一一（法政大学出版局）

畠山篤 一九九七「岩木山麓の水利伝承―津軽の大人（鬼）伝
承―」弘前学院大学・短期大学 地域総合文化研究所紀要九…
一―三一（弘前学院大学）

花部英雄 二〇〇四『漂泊する神と人』（三弥井書店）
広瀬伸 二〇〇三「水土と語られた歴史」『農業土木学会誌』

七二（三）…一八三―一八八（農業土木学会）

福士壽一 二〇〇六「津軽の鳥居の鬼コの背景―とくに役行者
（観音）と毘沙門天（鬼）との関連において―」『地域学』四…

七七―一一一（弘前学院大学）

フランク、ベルナル（仏蘭久淳子訳）一九九八「古代の鬼」
『風流と鬼―平安の光と闇―』…一七五―二七五（平凡社）

和歌森太郎 一九六九「山と鬼」『日本民俗学会報』六一…一
一一（日本民俗学会）

【付記】 本稿とその基であるシンポジウム報告の作成にあたっ
てはシンポジウム全体のコーディネイト及び司会を務められ
た山田巖子氏並びに共に報告を担当した佐々木達司、花部英
雄両氏、さらにコメントーターの飯倉義之氏の御教示に負う
ところが大きいことを明記し、改めて謝意を表する。

（こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館）